第２章　救いの９つの面
第八　子とされること

■本日のアウトライン

1. 「子とされること」の意味
2. 「子とされること」の３つの対象
3. 「子とされること」を具体的に理解するために必要な４つの事柄
4. 「子とされること」の結果

1. 「子とされること」の意味・・・子は成人すると、父から受け継いだ特権と権威を行使することになる。そのような正当な権利を有する子どもに位置づけられることを、「子とされる」という。
   (1) ヨハ 1:12「その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」
   (2) ロマ９：４
   (3) ガラ４：１〜５
   　　次で詳しく見る
2. 「子とされること ギ ヒュイオテシア」　その３つの対象
   (1) **イスラエル**：ひとつの民族として、神の子とされる。その意味において、イスラエルは、神の民である
      - ロマ９：４「彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約（複数形）も、律法を与えられることも、礼拝も、約束（複数形）も、彼らのものです」
      - ガラ４：５　「私たち（ユダヤ人信者）が子としての身分を受けるようになるためです」
   (2) **個々人の信者にとって、かつ、現在の地位として**・・・信者は、神の家族の中に入れていただいている。それは、すでに受けた現在の地位として「子とされている」
      - ロマ８：15「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、養子の霊を受けたのです。私たちはそれ（＝養子の霊）によって、『アバ、父』と呼びます」　→　3. で詳しく説明します
      - ガラ４：６〜７「あなたがた（異邦人信者たち）は子であるゆえに」
      - エペ１：５「私たちをイエス・キリストを通してご自分の子としようと、愛をもってあらかじめ定めておられました」
   (3) **信者にとって、将来の「子とされること」**・・・ロマ８：23「子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます」。これは、信者が将来、復活の栄光のからだを受けることを指している。私たちが、神の子として現在いただいているその地位にふさわしく、このからだも不死の栄光のからだに変えられ、内側にも罪の性質がない者として地上に立つ日が、将来必ず来る。

3.　「子とされること」を具体的に理解するために必要な4つのこと

(1) 子とされるのは、救いの第一の面「再生」によりすべての信者が救われたその最初に受けるものである。信仰生活を立派にしたことで得られる報いというようなものではない。

(2) 信者は信じたときに聖霊を受け、聖霊がその人の中に住んでくださる。聖霊を受けることと「子とされること」とは密接に関係している

① ガラ4：6　そして、あなたがたは子であるゆえに、神は、「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊を、あなたがたの心に遣わしてくださいました。

- 御子の御霊、すなわち第三位格の神である聖霊は、信者の心に遣わされて、その中に住んでくださる。
- 御子の御霊は、父なる神に、「父よ」と呼びかける。第二位格の神である御子イエスが父なる神に「父よ」と呼びかけたのと、同じである。
- 聖霊が信者の心の中に住み、父なる神に「父よ」と呼ぶことができるのは、信者が救われて神の子とされたからである。

② ロマ8：14～15　14あなたがたは、再び人を恐怖に陥れるような奴隷の霊を受けたのではなく、養子の霊を受けたのです。私たちは、それによって、「アバ、父」と呼びます。15私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。→■「養子の霊」について

(3) 信者が「子とされる」とは、神が信者の父となることである。

① 三位一体の神、その第一位格の父なる神は、第二位格の子なる神との関係において「父」である。

② そのお方が、信者にとって、彼らの神となり「父」となってくださる（ヨハ20：17、ガラ1：4）。

③ その意味で、第一位格の神のお名前「父」は、特別な名である。

(4) 父なる神と子なる神の関係を意識して使用する用語　3つ

① 「私たちの主イエス・キリストの父なる神」（ロマ15：6、Ⅱコリ11：31、エペ1：3、コロ1：3、Ⅰペテ1：3）

② 「父なる神」（ガラ1：1、エペ6：23、ピリ2：11、Ⅰテサ1：1、Ⅱテサ1：2、Ⅰテモ1：2、テト1：4、Ⅰペテ1：2、Ⅱペテ1：17、Ⅱヨハ3、ユダ1、黙1：6）・・・子なる神とは区別して特に父なる神に焦点をあてるとき

③ 「私たちの主イエス・キリスト」、「主イエス・キリスト」、「イエス・キリスト」、「私たちの主イエス」（ロマ1：6、Ⅰコリ1：3、Ⅱコリ1：2、ガラ1：3、エペ1：2、Ⅰテサ1：3、3：11、13、Ⅱテサ1：1～2、2：16）・・・特に子なる神に焦点をあてるとき

4. 「子とされること」の結果

(1) 神の子となったことで、信者は神のケアと思いやりを受ける人となった（マタ6：26、30、31、7：11）

(2) 父と子の関係になったことで、父が子に対してする訓練を受ける人となった（ヘブ12：5～11）

(3) 子としての地位についたことで、信者は大胆に神に近づく権利を得た。

① 信者は神の家族の一員となったことで、神の家族としての権利や特権を持つ者となった。

② それらの特権のひとつが、大胆に神の御座の前に進み出ることである（ヘブ4：14～16）

(4) 子とされたことで、信者は、日々、神の御子の似姿に変えられていく。信者の人生の中で聖霊がなさる働きのひとつが、これである。信者は神の家族の中で成長し、御子の似姿にますます似るようにされていく（Ⅱコリ3：16～18、コロ3：10）

(5) 子とされたことで、信者は、相続人、それもメシアとの共同相続人となった。メシアは父なる神との関係では初めから子であられる、それに対して、信者は信じたときに養子とされた子である。信者は養子となって、メシアとの共同相続人の地位に就いた（ロマ8：17、ガラ4：7）

(6) 子とされたことで、信者は、メシアの弟となった。

① メシアは、「神－人」、神であり、同時に人であられる。メシアは、神であるという神性を持っておられるだけではなく、イエスという名の人としての性質、すなわち「人性」を持っておられる。

② イエスの神性のみならず、イエスの人性においても父なる神が「父」である。イエスは処女マリヤから聖霊によってお生まれになったが（マタ1：18、20）、これは父親が聖霊というわけではなく、父親は「父なる神」である（マタ3：17）。

③ 人である信者は、父なる神の子とされたことで、人としてのイエスとの関係において、イエスの弟となった（ヘブ2：11、17）

- ヘブ2：11　「聖とする方（イエス）も、聖とされる者たち（ユダヤ人信者たち）も、すべて元は一つ」＝人としてのイエスも、アブラハム・イサク・ヤコブの子孫であるイスラエル民族である
- ヘブ2：11～13　イエスはユダヤ人であり、イスラエルの中の信仰あるレムナント（イスラエルの残れる者＝少数ではあるが真の信仰者たち）は、イエスにとって兄弟となる。
- 子とされること、ひいてはイエスの兄弟となることも、イスラエル民族のもの（ロマ9：4）であったが、イスラエル人だけでなく、アブラハムの信仰にならう人々もこれにあずかることとなる（ロマ4：16、11：17）。

(7) 子とされたことの7番目の結果は、自由である。神の恵みの中で、信者は自由を得て、その自由を働かせることができる

- ガラ5：1　キリストは、自由を得させるために、私たちを解放した
- ガラ5：13　その自由を肉の働く機会とせず、愛をもって互いに仕える
- ガラ5：16～18　御霊によって歩む。そうすれば、肉の欲望を満足させることはない。→「御霊によって歩む」第4章　聖化　にて扱う。
- ロマ8：14　神の子とされた結果、神の御霊に導かれる。

■ロマ8：15「養子の霊」についての説明

1. 新約聖書の用語で、最も文脈に注意して読むべき用語は「霊」である。「霊」には3つの意味がある。

(1) 神の霊としての「霊」

① 「聖なる」という形容詞がつくと、聖霊である。明らかに、神の霊である。

② 「聖なる」という形容詞がついておらず、ただ「霊」とあっても、文脈と前後関係から神の霊であると理解できる場合、これも神の霊である。

③ 聖書の翻訳では、②であると考えられた場合、「御霊（みたま）」と訳することがある。ただし、ここには翻訳者の解釈が入るので、日本語聖書で「御霊」と表記されていても、聖書原文の意味では、神の霊ではなく、他の2つの意味に当たる場合も稀にあるので、文脈や前後関係に注意して読む必要がある。

④ 神は物質的存在ではない。神は霊である（ヨハネ4：24）。よって、父なる神、子なる神、聖霊なる神、これら3つの位格すべてが「霊」である。

- 父なる神は、私たちの礼拝の対象であり、祈りの対象である。
- 子なる神は、人の目に見えない神（Ⅰヨハネ4：12）を人に分かるように現れてくださるお方（ヨハネ14：8～9）である。旧約聖書では「主の使い」として登場した。新約聖書の福音書では、人となられて、イエスという名で地上を歩かれ、十字架にかかってくださった。死から復活し、天に帰ったあとも、人としてのからだを持ち続けておられる（使徒1：11、7：55、ヘブル5：1～2、8：1～2）。これは、不死のからだ、しかも天にのぼることもできる、栄光の体があることの証明である。この栄光の体が、将来私たち信者にも与えられるのである。
- 聖霊なる神は、旧約時代では、士師たちや預言者たちの上にとどまり、大きな働きを導かれた。新約時代では、聖霊は信者たちひとりひとりの内側に入ってくださり、「もうひとりの助け主」（ヨハネ14：16）となっておられる。

(2) 人の内側、いわゆる霊魂の要素のひとつである「霊」

① 人は、外側の物質的部分である「からだ」と内側の非物質的部分とから成る。

② 内側の非物質的部分には、霊、魂、心、思考、意志、良心という6つの要素が、互いに重なり合う機能を持ちつつ、それらが一体となって働いている。

③ 人が堕落した結果、7番目の要素として、罪の性質が加わった。罪の性質は人の非物質的部分を構成する6つの要素に重大な影響を及ぼしている。

④ 聖書は、この罪の性質を「肉」と呼ぶ。したがって、「肉」という用語は文字通り、からだを指す場合と、罪の性質を指す場合とがある。

⑤ 6つの要素の中で、特に神との関係、天との関係で働く要素が霊である。それに対して、魂はからだとの関係、地との関係で働く要素である。

(3) 人が救いを受けたときに受ける新しい性質としての「霊」

① 人が聖霊によって再生されたとき、すなわち救いを受けたときに、その人は信者となる。このとき、信者の内側には、新しい性質が与えられる。

② ヨハネ3：6「御霊によって生まれた者は霊です」。人は聖霊によって再生し、信者となる。そのとき、信者の内側には、新しい性質が与えられる。これを「霊」と呼ぶ。「

③ ロマ8：10「もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています」。ここでいう「霊」は、救われたときに信者に与えられる新しい性質である。

④ 新しい性質「霊」が入ると、6つの要素「霊・魂・心・思考・意志・良心」は新しくされる。しかし、罪の性質である「肉」は、新しくされる対象ではない。それが小さくなったり、改善されたりすることはない。罪の性質である「肉」は、信者が死ぬときに取り去られる。よって、肉体の死までは、信者の中には、罪の性質「肉」が存在する。

⑤ では、信者になると何が変わるのか。信者になる前と、信者になった以降とで、決定的に異なるのは、信者は罪の性質「肉」の束縛から解放されており、自由である、という点である。信者でない人は、罪の性質によって考えたり、行動したりするほかない。新しい性質を持っていないからである。しかし、信者は、新しい性質が与えられていて、選択が可能となっている。

⑥ よって、信者が死ぬまでの間、信者の信仰生活は、新しい性質「霊」に従うか、罪の性質である「肉」に従うかの、選択の連続である。そのとき、信者の内側に住んでいてくださっていて、信者を助けてくださるのが、聖霊である。それゆえ、聖霊は、「もうひとりの助け主」（ヨハネ14：16）と呼ばれる。

⑦ 聖霊によって信者が信仰生活を歩むとき、信者は神を「アバ、父」と呼んで、愛し、信頼するようになる。それは、信者に与えられた新しい性質「霊」が、単に信者の内側を新しくするだけでなく、信者自身を神の子とするものだか

らである。

2. ロマ8：15の「養子の霊」とは、第三位格の神「聖霊」ではない。16節では「御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証言してくださる」とあるように、信者の霊と聖霊とは、きちんと分けて論じられている。
   (1) ヨハネ3：6「御霊によって生まれた者は霊です」。人は聖霊によって再生し、信者となる。信者の内側には、新しい性質が与えられる。これが「霊」である。
   (2) ロマ8：15は、新しい性質である「霊」を、特に「養子の霊」と呼ぶ。
      ① 信者の内側には、7つの要素がある。霊・魂・心・思考・意志・良心、そして堕落後に入った罪の性質「肉」である。
      ② 新しい性質「霊」が入ると、6つの要素「霊・魂・心・思考・意志・良心」は新しくされる。しかし、罪の性質である「肉」は、新しくされる対象ではない。それが小さくなったり、改善されたりすることはない。罪の性質である「肉」は、信者が死ぬときに取り去られる。
      ③ よって、信者が死ぬまでの間、信者の信仰生活は、新しい性質「霊」に従うか、罪の性質である「肉」に従うかの、選択の連続である。そのとき、信者の内側に住んでいてくださっていて、信者を助けてくださるのが、聖霊である。それゆえ、聖霊は、「もうひとりの助け主」（ヨハネ14：16）と呼ばれる。
      ④ 選択において、重要なことは、次の3つ。
         - 私たちは弱い者であるという自覚と聖霊が助けてくださるという平安である（ロマ8：26）。
         - 次に、自分の判断や能力で行動する前に祈ること。このとき、私たちはどのように祈ったらよいかわからないが、聖霊が私たちのためにとりなしてくださる。しかも、それは神のみこころに従ってのとりなしなので、必ずその祈りは聞かれ、神が事を運んでくださる（ロマ8：26～27）。
         - そして、目の前の状況に一喜一憂せずに、「もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは忍耐をもって熱心に待ち望みます」（ロマ8：25）とあるように、忍耐をもって待ち望むこと。
      ⑤ 一言でいえば、神の愛に対する信頼である（ロマ8：32～39）。
      ⑥ このような信仰生活の特徴は、信者が神を「アバ、父」と呼んで、愛し、慕い、信頼するところにある。それは、信者に与えられた新しい性質「霊」は、単に信者の内側を新しくするだけでなく、信者自身を神の子とするものからである。
3. それゆえ、使徒パウロは、新しい性質「霊」を、ロマ8：15では、「養子の霊」、神の子とされた者の霊、と表現する。